

長期キャンプに参加した小学生の親和動機の変容について ～奄美大島サマーキャンプを事例として～

樋高 喜大 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 林 綾子

キーワード：親和動機、親和傾向、拒否不安、長期キャンプ

第1節 序論

今日の学校現場において、いじめ、学級崩壊、不登校、そして問題行動など、いわゆる学校不適応と呼ばれる現象が社会現象となっている。筆者は良好な人間関係を築くための要素として親和動機に着目した。本研究における親和動機とは、杉浦(2000)が述べた、「他者と友好的になり、それを維持しようとする欲求」と捉える。親和動機には2つの側面があり、一つは他者からの拒否を恐れる側面である「拒否不安」、もう一つは拒否に対する不安やおそれなしに人と一緒にいたいと考える側面、「親和傾向」である。

キャンプ体験の中で様々な野外活動を仲間と体験することが親和動機の向上に繋がると考えた。このことから本研究では、長期キャンプに参加した小学生の親和動機の変容について明らかにすることを目的とした。

第2節 研究方法

【調査対象】奄美大島のキャンプ場で行われた「奄美大島サマーキャンプ」に参加した小学1年生から6年生40名のうち、小学3年生以上の21名の児童を対象とした。

【調査方法】児童用親和動機尺度(藤枝, 2009)の5件法アンケート14項目と筆者が独自に考えた記述式アンケート6項目を行った。時期はキャンプ初日、1週間後、2週間後の計3回行った。14項目のうち2項目の正規性が確認されなかったため削除し12項目を用いた。

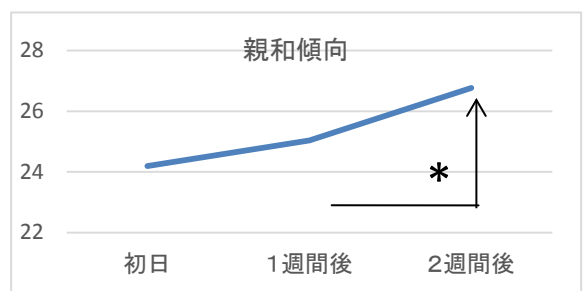
第3節 結果

因子別に一要因の分散分析を行った結果、親和動機については時期による有意な変化がみられた(表1)。そこで多重比較を行ったところ親和傾向にのみ1週間後から2週間後に有意な向上が見られた(図1)。

表1 親和動機得点の平均値、標準偏差

	キャンプ初日	1週間後	2週間後	F値
親和傾向	24.19(3.72)	25.04(3.74)	26.76(3.49)	4.61*
拒否不安	25.38(5.19)	26.61(3.42)	27.38(3.23)	3.07†

* $p < .05$ † $p < .10$



* $p < .05$

図1 親和傾向全体の多重比較の結果

キャンプ初日からキャンプ1週間後で有意な変化が見られなかった要因として考えられるのは、親和傾向のアンケート項目が関係しているのではないかと考えられる。「友達とは本当の気持ちを話せる関係でいたい」、「友達には自分の考えていることを伝えたい」などの深い質問項目となっているため、1週間だけの体験では有意な変化が見られなかったのではないかと考えられる。長期間のプログラムでは、キャンプ初日からキャンプ1週間後にかけて始めは友達になりたいと思う気持ちから始まり、次第にキャンプ生活をしていくうちに深い関係を求めるようになり、相手の事をもっと知りたいと思う気持ちに変化し親和傾向に影響したと考えられる。またプログラム内容も関係があると思われる。児童達は活動内容を選択することができ、興味のある活動や、仲の良い友達と活動を共にすることができた。また、サバイバルキャンプなど普段の生活では体験することが出来ない厳しい環境下での仲間との活動や助け合い、仲間と協力しての目標達成から、時間をかけて友達関係を築いたことが親和傾向向上の大きな要因として考えられる。拒否不安に関しては、キャンプを通して常に一定の他者からの拒否への不安を感じていたと考えられる。

親和傾向と拒否不安の関連を調べるために相関分析を行った結果、全ての時期において親和傾向と拒否不安の間に有意な正の相関がみられた($r=.757^{**}$)($r=.636^{**}$)($r=.731^{**}$)。この結果は、キャンプという限られた人間関係の中での環境が要因の一つだと考えられる。仲良くなりたいと、思うと同時に相手から嫌われたくないという気持ちになり、親和傾向が高ければ、拒否不安も高いという結果になったと考えられる。キャンプならではの結果だと考えられる。

第4節 まとめ

本研究からキャンプを行うことで児童の親和動機は向上することが分かった。またキャンプ後半に親和動機が向上することが分かり、長期プログラムの効果が証明されたといえる。親和動機の向上にはキャンプは有効であるが、キャンププログラムの工夫や、班編成の工夫、非日常的な体験をすることで、仲間との助け合いや協力が生まれ、助け合いや協力が親和動機向上に有効であると考えられた。

親和傾向が高ければ、拒否不安も高いと結果になったのはキャンプという特殊な空間で行ったからこそこの結果だと考えられる。今後他の場面での検討が必要だと感じた。

引用文献

- 1) 藤枝静暁・新井邦二郎(2009) 児童用親和動機尺度の開発.筑波大学発達臨床心理学研究, 20: 1-9.
- 2) 杉浦健(2000) 2つの親和動機と対人的疎外感との関係 ―その発達の变化―.教育心理学研究, 48: 352-360.